

<第37回東京国際映画祭 開催概要>

■開催期間：2024年10月28日(月)～11月6日(水)

■会場：日比谷・有楽町・丸の内・銀座地区 ■公式サイト：www.tiff-jp.net

<TIFFCOM2024 開催概要>

■開催期間：2024年10月30日(水)～11月1日(金)

■公式サイト：www.tiffcom.jp

フェスティバル・ナビゲーター菊地凜子 コンペティション部門選出の邦画3監督 Nippon Cinema Now 監督特集の 入江監督が登場

第37回東京国際映画祭ラインナップ 発表

9月25日(水)に東京ミッドタウン日比谷 BASE Q HALL にて第37回東京国際映画祭のラインナップ発表記者会見が開催。ゲストとして、フェスティバル・ナビゲーターとして菊地凜子とコンペティション作品より大九明子監督、吉田大八監督、片山慎三監督、さらに Nippon Cinema Now 監督特集の入江悠監督が登場した。

今年の映画祭は、10月28日から11月6日の10日間、昨年に引き続き日比谷・有楽町・丸の内・銀座地区にて開催。また、昨年同様にオープニングのレッドカーペットを日比谷仲通りにて開催予定。映画祭併設のビジネスコンテンツマーケット TIFFCOM は、10月30日から11月1日の3日間の同時開催。

「東京から映画の可能性を発信し、多様な世界との交流に貢献する」を目指し、新部門の創設など映画人や映画ファンの交流の場を様々な形で実現させていく。

東京国際映画祭チェアマン安藤裕康による開催の挨拶で会見は始まり、本年度の映画祭の特色として国際交流、人材育成、女性への視座という3つの柱を掲げた。「国際交流があるのは当然だが、今年はもっと力を入れる。ミッドタウン日比谷の1Fの LEXUS MEETS... にて交流できるラウンジを設け様々なトークイベントや映画人の交流の拠点とする。また、日本とイタリアが共同製作協定を今年初めて結んだ。今後もっと増やして行ければと思うし、それに関する特集も行う。そして、未来の映画人材を育てていく。TIFF ティーンズ映画教室、アジアの生徒向けマスタークラス、

Amazon Prime Video テイクワン賞や黒澤明賞などで今後の映画界を担う人材を発掘してきた。東京国際映画祭初の外国人プログラマーを招き、女性の活躍支援を目的にウィメンズ・エンパワーメント部門を新設した。また過去にあった東京国際女性映画祭で活躍した人々を招いたイベントも行っていく。」と発表。

フェスティバル・ナビゲーターに就任した菊地凜子が登場。菊地は「映画と共に育ってきた、このような大役が私に務まるのかなどは思いましたが、日本を代表する映画祭に携われて光栄です。」と任命された想いを語った。

その後、プログラミング・ディレクターの市山尚三より「コンペティション部門」15作品の紹介に続き、「コンペティション部門」に選ばれた日本映画3作品を発表し、『雨の中の慾情』の片山慎三監督、『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』の大九明子監督、『敵』の吉田大八監督が登場。片山監督は「東京国際映画祭で観た方に他の映画祭に呼んでいただいたり、広がりがある映画祭というイメージ」、大九監督は、「見つけて頂いたという気持ちがあります。まさか今年も選ばれるとは思っていませんでした。」、吉田監督は「当時六本木で行われていたのですが、いい意味で浮ついた映画祭だなと(笑)。楽しかった思い出があります。」と映画祭の印象について語った。

さらに、今年の「Nippon Cinema Now 部門」にて特集を組んだ入江悠監督が登場。入江監督は「東京国際映画祭は、日本を代表する映画祭で、権威というイメージです。初めて参加した時は、尖っていてジャージで登壇してしまいました。また帰ってこれて嬉しいです。」と特集される喜びを語った。続けて、今年新設された東京都と連携し女性監督の作品、あるいは女性の活躍をテーマとする作品に焦点をあてた「ウィメンズ・エンパワーメント」部門についてアンドリ

ヤナ・ツヴェトコビッチ シニア・プログラマーより紹介された。「様々な国からパワフルなラインナップが上映されます。女性の力強さ、アイデンティティ、変容を表す珠玉の作品たちです」と同部門の上映作品に胸を張る。

その後、藤津亮太プログラミング・アドバイザーより「アニメーション」部門の作品を紹介。

さらに司会より「黒澤明賞」や「エシカル・フィルム賞」「交流ラウンジ」などのその他の部門の紹介、オリジナルグッズの紹介など例年以上の盛り上がりが見られる様々なイベントの紹介がされ、最後に質疑応答が行われ、会見は終了。

第37回東京国際映画祭は10月28日(月)～11月6日(水)の10日間の開催期間中、200本の映画が上映。

【菊地凜子 Q&A】

Q. 菊地さんは今回ナビゲーターということですが、最初聞いたときはどうでしたか？

映画と共に育ってきたので、このような日本を代表する映画祭に携われて光栄です。

Q. 菊地さんの東京国際映画祭へのイメージってどんな感じでしたか？

東京国際映画祭は、街中にレッドカーペットがあったりと東京というユニークな都市で開催されている特別な映画祭だと思います。

Q. 菊地さんは色々な海外の映画祭にも参加されてきたかと思いますが、映画祭の楽しさはどんなところにありますか？

いろいろな作品で映画祭に参加するときは、皆さんに応援していただいているというかご褒美をいただいているというか、何とも言えない感動があります。また、映画という言葉を通じて、著名な海外の映画人と交流出来るのは凄いですよね。多くの人に見ていただいて監督、スタッフ、みなさんと手をつないで映画を届けられるのは素晴らしいことです。

Q. 菊地さんにとって映画とはどんな存在でしょうか？

映画というのは、明日も頑張ろうという気持ちになれるし、その世界を旅してその人の人生を持って帰れるもの。私が出演することで、少しでも返して行ければと思います。

【片山慎三監督、大九明子監督、吉田大八監督 Q&A】

Q. 監督にとって東京国際映画祭はどんな存在でしたか？

片山監督：東京国際映画祭で上映してほかの映画祭に呼ばれたりとか、広がりのある映画祭だと思いました。

大九監督：二度賞をいただいているので今回また呼んでいただいて、すごく驚き光栄です。何かお返しができればと思います。

吉田監督：六本木でやっていたときは、いい意味で浮ついたお祭りの印象がありました。とても楽しかったですね。

Q. 東京国際映画祭のコンペに選ばれた作品について、どういう趣旨で作品を作られましたか？

片山監督：9割方台湾で撮影したので、街の風景を楽しんでいただけたらと思います。

大九監督：とても若い俳優たちと作る映画だったんですけど、若い人たちだからこそ普段思っている些細なことをどんどん盛り込んでいこうという形で、すごくわがままに作った映画なのでどうみなさんに反応していただけるか楽しみです。長回しが多かったのですが、素晴らしい若手俳優が持っているものを、最大限引き出したかったからです。

吉田監督：コロナの時に昔読んでいた本を読み返していて、凄くハマりました。モノクロの理由は、主人公のストイックな生活を描くのに抑制されたモノクロを使うことで、表現しなかったから。想像力を掻き立てられるので、思ったより豊かな作りになりました。

吉田監督：コロナの時に昔読んでいた本を読み返していて、凄くハマりました。モノクロの理由は、主人公のストイックな生活を描くのに抑制されたモノクロを使うことで、表現しなかったから。想像力を掻き立てられるので、思ったより豊かな作りになりました。

【入江悠監督 Q&A】

Q. 監督にとって東京国際映画祭はどんな存在でしたか？

権威というか、日本を代表する映画祭。そこは変わらないですね。

Q. 東京国際映画祭で特集が組まれると聞いたときはいかがでしたか？



左からコンペティション作品より大九明子監督、吉田大八監督、フェスティバル・ナビゲーターとして菊地凜子、片山慎三監督、さらに Nippon Cinema Now 監督特集の入江悠監督が登場した。

自分のフィルモグラフィーを振り返ると一貫性がないですね。

Q. 本当に色々なジャンルの作品を手掛けてますが、何か大事にしていることはありますか？

意識していることはないのですが、題材もジャンルもバラバラで。飽きっぽいというところがあります。大作をやると小さい作品がやりたくなるんですよ。

【菊地凜子、大九監督、吉田監督、片山監督、入江監督への質疑応答】

Q. 映画祭が今後どう発展していけばいいか
A. 大九：新しい監督と私も出会いたいし、そういう場になってほしい。すべての作品に開かれた環境があれば。

吉田：人が集まって映画を観るというのは、また違ったパワーが出るんじゃないかなと思う。できるだけ長く続いてほしい。

菊地：映画祭を通してクリエイターの方たちが繋がっていくということがすごく大事なかなと思います。こうやって様々な監督とお会いしたので自分をアピールしていきたい

片山：映画に興味ない人が映画祭を通して、新しい作品を、普段観れないような作品をどう観るかということが大事だと思う。その辺りをもっと広げていってくれたら嬉しいです。

入江：日本の映画の製作現場は貧しくなっ

ている。世界各国の人と映画祭を通じてそういう部分を共有して話し合っただけで発信できる場になっていけたらいいなと思います。

「コンペティション部門」応募作品数 () 内は昨年数：2,023 本 (1,942 本) / 国と地域数：110 (114)

・男女共同監督作品含む女性監督の作品は全体の中の 35 本 (19.44%) ※同じ監督による作品は作品の本数に関わらず 1 人としてカウント (昨年度の男女共同監督作品含む女性監督作品は 35 本 (20.59%))

<第 37 回東京国際映画祭 開催概要>

■開催期間：2024 年 10 月 28 日 (月) ~ 11 月 6 日 (水)

■会場：日比谷・有楽町・丸の内・銀座地区

■公式サイト：
www.tiff-jp.net



<TIFFCOM2024 開催概要>

■開催期間：2024 年 10 月 30 日 (水) ~ 11 月 1 日 (金)

■公式サイト：
www.tiffcom.jp

